

2019年  
12月13日  
金曜日

詩篇23…4「たとえ死の陰の谷を歩むとしても、私はわざわいを恐れませぬ。あなたがともにおられますから。」

讚美歌「久しく待ちにし 救いの主 来たり、とらわれの民を 解き放ち たまえ、喜べ、インマヌエル 来たりて救いたもう」(讚美歌21、231 ラテン語聖歌の最初の部分)

アフガニスタン・ペシャワールで30年以上も、医師として、さらに気候温暖化に伴う水害にも耐えうる農水路建設に、現地の人々と共に働いてきた中村 哲さんが12月4日に殺害されました。ペシャワール会を支援する一人として、私にとっても、あまりに大きいショックです。

中村さんは、その著書で、ヘブライ語の「インマヌエル」を「天、共にあり」と訳しておられます。

アフガニスタンは、1980年代のアフガン内戦とソ連軍介入で、200万人以上の死者を出し、周辺

井口 泰 教授 (労働経済学)

# 「天、共にあり」(経済と倫理)

諸国に400万人以上が難民となりました。この近辺の地域は、アルカイダの発祥の場所と言われます。2000年には、大旱魃で農村が疲弊し、400万人以上が餓死寸前で、感染症が大流行し、100万人が流民化したと言われます。日本のNGOペシャワール会は、現地にハ

ンセン病の病棟を建てて医療協力を進めていました。2001年9月の同時多発テロ後、アメリカ軍の報復攻撃が始まって農村は、さらに疲弊しきつてしまいました。

栄養失調と清潔な水の欠乏を解決できず、医療協力の限界を知った中村さんは、大旱魃と飢餓対策のために、20キロにも及ぶマルワリード用水路の建設と砂漠の緑地化事業を開始しました。それは現地の農民たちの伝統を尊重しつつ江戸時代に建設された日本の灌漑施設(佐賀藩)の知恵を生かし、さらに地域の村落共同体を復興させて、流出した人々の帰還を可能にする複合的で困難極ま

る事業だったので。

しかし、パキスタン国境の近いこの地域は、外国の軍隊が引き揚げ、治安は悪化の一途をたどりまし

た。2008年に同僚の伊藤和也さんがテロ組織に誘拐・殺害されました。用水路の完成をひかえ、帰農や人材養成を開始する大事な時に、日本人即時帰国の号令がかかったことは大変な試練でした。実際、米軍の誤爆で多くの民間人が命を落としました。

それにもかかわらず2010年には、洪水にも渇水にも耐えられる用水路が開通し、補修を繰り返したうえ完成し、十数万人の帰還に向けた農村の緑地化と復興が進んだのです。

荒廢した農村を気候変動にも耐えられるように再建し、故郷を自ら維持し発展していく事業を支えたのは、地元民との相互の尊敬と信頼であり、軍事による平和でも、経済成長でもなかったのです。自然は制御できないものであり、自然と和解してこそ、そこに恩恵が与えられること

を、この事業は身をもって証明したのです。最新鋭の技術と、コンクリートや重機主体の水路建設の場合、その後の取水・排水の制御や施設の維持・補修を地元民自身で行うことができず、災害発生などで事態が悪化した例がいくつもあるからです。

アジアのインフラ整備と経済成長のための国際プロジェクトが進む中で、農村の荒廢が放置され、国内の経済格差が拡大し、若者を中心に人口流出が進む開発の発想を深く考え直さねばなりません。私は今日の「経済と倫理」でデジタル化とグローバルゼーションについてお話する予定でしたが、変更しました。日本人たちは難民経験が希薄で、アフガニスタンも遠い国でした。しかし中村哲さんは、アフガニスタンの人々と日本の私たちの心のつながりを作ってくださいました。それが、平和で協力しあうアジアへの礎石となりました。それは、永久に消えることはありません。